

杉戸町立杉戸第二小学校 令和6年度 学校評価(学校自己評価・学校関係者評価)

評価項目	目標	具体的取組	指標 (指標ごとの評価)	自己評価		改善策	学校関係者評価	
				評価	達成状況(成果・課題)		評価	意見・要望・支援策等
確かな学力	自分の課題に向かって、自ら問題解決していく力を定着していく授業実践	○「一人一人の子供を主語」に、「個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実し、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」を日々の授業で行う。 ○「安心して学び合える学級経営を土台」に、「基礎学力の定着」と「学び方スキルの定着」を徹底する。	○教職員が高め合う研修とチャレンジ授業(全教員学期1回以上)の実施 ○学校アンケート(知)【児童・保護者・職員平均85%以上】	A	○授業改善を意図して行う学期1回以上のチャレンジ授業は実施することができた。全教員が「深い学び」を行うために、教科等の「見方・考え方」を徹底した授業を行うことは今後の課題である。 ○学校アンケート(知)の結果は86.7%。「安心して学び合える学級経営」「基礎学力の定着」「学び方スキルの定着」は今後も引き続き取り組む必要がある。	○来年度の「杉戸第二小学校学力向上プロジェクト」を改良し、全教職員で取り組む方向性を確認し、共通理解した上で進める。 ○「学力向上プロジェクト」に示した授業改善に沿ったチャレンジ授業を実施する。 ○校内、他校の授業を「見る」ことから学び、それを自分の授業に活かす。	A	○授業を見て、先生方が意欲的に授業改善に取り組んでいると感じる。 ○個に合わせた指導が素晴らしい。 ○指導法等を教員同士で共有したり、工夫したりしているのを感じる。 ○改良された「杉二小プロジェクト」を校長のリーダーシップのもと、方向性を共通理解し進めることは学力向上につながる。 ○チャレンジ授業を実施することは授業力向上、深い学びにつながる。ただし、教員の負担軽減の工夫をする。 ○自ら考える授業には家庭学習が大切である。 ○児童の後期アンケート結果が下がっているのが気になる。 ○自主学習のやり方、必要性に対する認知の差が異なるので多少の共通認識が必要。
豊かな心	自分のよさを認識し、多くの人々と協働していく児童の育成	○全教育活動を通し、「自己肯定感」、「自己有用感」を高めていく。 ○「児童自身で問題解決をする場」を意図的に設定し、児童の「自ら…」を育む。 ○他者とかかわる上で必要な「コミュニケーション力」や「規範意識」を道徳の授業実践を中心に全教育活動で行う。 ○学校好きの児童を増やすことで不登校児童を減らす。	○ぼっかぼかカードの全学級実施 ○学校アンケート(徳)【児童・保護者・職員平均85%以上】 ○不登校児童R5 13名以下	A	○ぼっかぼかカードに加え、きらり賞を実施。児童の学校アンケート「自分のよさを知っている」の結果は97.1%と大変高かった。(徳)の児童・保護者結果も91.8%と大変高かった。 ○「自ら…」の部分については意図的に指導していく必要がある。 ○コミュニケーション力を高める活動として、1年生から6年生までの縦割り班活動を取り入れることができた。規範意識については引き続き指導が必要である。 ○12月現在、不登校児童数は10名。	○本校児童に必要な豊かな心を育むため、次年度「非認知能力育成プログラム」に具体策を示していく。 ○児童が「自ら」考え、行動するために、自己決定する場面や自分たちで企画・実行する活動を取り入れていく。 ○縦割り班活動を年間を通して行ない、他学年との交流、協力する大切さを学べるようにしていく。 ○不登校対策を学校全体で取り組んでいけるようにするために、研修を行い、組織的な対応を行うシステムづくりを行っていく。同時に児童が本校での学校生活を楽しみと思えるような取組を行っていく。	A	○子供たちが自分のよさを知っていることはよいことである。課題を知ることにもつながる。 ○縦割り班活動の取組は大変よい。社会に出て役立つ。6年生の考えたゲーム大会は、学年を超えて楽しめるものとなっていた。 ○ぼっかぼかカード、きらり賞などの取組は子供たちのやる気につながる。 ○ぼっかぼかカードは異学年同士のやり取りが見え、素晴らしいと思う。 ○子供同士の教え合いや互いに補い合う意識が高まっている。 ○非認知能力は大事であり、授業の中での具体策を考案し、実践するようにする。 ○小学校では学習習慣の定着が求められ、自ら動くことで培われる。自己決定を多用する活動は効果的である。 ○不登校には組織的システムで対応し、その手法を蓄積する。よく話を聞き、丁寧な対応が必要。
健やかな体	たくましく生き抜く児童の育成	○全教育活動を通し、「やりぬく力」を高めていく。 ○体育の授業を中心に、「体力の向上」と、「運動好き」の児童を育成する。 ○家庭と連携し、規則正しい生活習慣の向上を行う。	○学校アンケート(体に関する項目)【児童・保護者・職員平均85%以上】	C	○(体)児童・保護者・職員結果は78.3%と低い。 ○運動好き、進んで運動についても課題がある。	○子供たちが全力で体育授業に取り組む、運動の楽しさを味わう授業を実現するため、杉戸町教育委員会が作成した「体育5つの視点チェックシート」を活用した授業を行っていく。 ○チャレンジタイム(体育の業前運動)を計画的に実施する。	B	○8の字跳びや時間跳びで目標設定することで、児童が運動を進んで行うことにつなげている。 ○チェックシートを活用し、運動量の多い体育授業、運動の楽しさを味わえる体育授業にする。 ○チャレンジタイムを充実するとともに、同様の運動を家庭や地域でできるように工夫する。日常生活から運動できる子へとする。 ○東海道五十三次に見立てた持久走練習は効果的。運動は楽しいと思わせる工夫が必要。
学校独自	家庭・地域とともにある学校づくりの推進	○学校の取組を積極的に家庭・地域へ学校だより、すぐる等で発信・公開する。 ○学校運営協議会を中心に学校・家庭・地域が協働して子供たちを育む取組を実施する。	○学校アンケート(全般に関する項目)【保護者・職員平均90%以上】	A	○学校の取組をすぐる、学校だより等で積極的に配信・公開することができた。学校アンケート結果も95.0%と大変高かった。 ○学校運営協議会として学校支援をたちあげることでできた。 ○働き方改革への協力体制構築にはまだまだ働きかけが必要である。	○引き続きすぐるや学校だより、懇談会等で学校の取組を積極的に配信・公開していく。 ○学校運営協議会の学校支援体制を少しずつ広げていけるようにする。 ○働き方改革の教職員の意識改革は進めることができた。ボトムアップ型の業務改善を取り入れていく。	A	○特にすぐるで学校の取組を数多く配信することは学校の透明性を高める。 ○学校支援体制を拡大することは、地域の教育力の活用であり、地域とともにある学校づくりになる。 ○子供たちが地域の方々を知り、地域が好きになるような体験授業があってもよい。 ○学校でやること、家庭でやることを明確にして連携しながら児童の教育を推進する。学校で指導、家庭で教育、地域で実践で身に付けてくことが大切。 ○ボトムアップ型の業務改善を引き続き進め、質の高い教育につなげてもらいたい。 ○教員が家族のため休みがとれていることを知れて安心。 ○子供から放課後、友達と遊びやすくなった、帰ってからゆっくりできるようになったと喜ぶ声を聞いている。時短は賛成。働いている保護者は早めに年間予定、日課表があるとよい。 ○働き方改革への保護者の認知度が低い。引き続き説明が必要。
	子供たちと向き合い、質の高い教育活動を進めるための働き方改革の実現	○働き方改革への協力体制の構築するため、保護者・地域へ取組を紹介していく。 ○カエル会議実施から考案された業務改善を導入する。	○学校評価(働き方改革に関する項目)【教職員95%以上】 ○全教職員超過時間月45時間、年360時間以内	B	○カエル会議実施から考案される取組についても課題が残る。全教員超過時間についても、昨年度より大幅に減少しているものの、指標には達していない。	○子供たちと向きあい、質の高い教育活動を行っていくために、日課表や教育課程の見直しを行い、実施していく。		